

肘水

射水神社社報 平成19年1月発行

第9号



ご挨拶

射水神社宮司 松本正昭

新年明けましておめでとうございます。

年明けの午前三時、歳旦祭をご奉仕申しあげ、謹んで聖寿の萬歳と竹の園生の弥栄を壽ぎ奉賛会の皆様をはじめ、崇敬者各位のご隆昌とご多幸をご祈念申し上げた次第であります。

時代の移り変わりと共に、その家々の流儀や作法、習慣などを意味する家風という言葉がほとんど顧みられなくなつた今日では、昔からの正月の風習も次第に失われてきております。

かつては、年末になれば、それぞれの家に正月の年神をお迎えするために、一年のほこりと煤を落とす「煤払い」をして家の中を清め、家の前には門松を立て注連縄を張り、正月を迎える風習が護り伝えられてきました。

ところで、年神様はいつたいどのような神様で、なぜ門松を立てるのでしょうか。年神様はまた、「年徳神」「歳徳神」「正月神」とも言われています。わらべ歌に

正月さん どこまでござつた
きりきり山の下までござつた
お土産になに持つてござつた
小豆俵に米俵

という歌があります。

この歌からもわかるように、年神様は高い山から里に降りて、里人に一年の自然の恵みと幸せを齎す神様と言ひ伝えられております。先人は、人間は穀物に宿る霊によつて生かされている。ゆえに、人の命と穀物の命と一体と考え、死語、魂は自然に返り常世の神として春には里に降り田の神になり、秋が過ぎれば山に帰つて山の神になると信じられていました。そして正月には年神様となり、子孫の繁栄と幸福を見守つてくださると信じられてきました。つまり年神様は祖先の神様であり、穀霊でもあり、家の守り神様でもあるのです。その年神様が山から降りて来るときにまず目標とし、それぞれの家に入る前に一旦留まつてもらふために依代よりしろとして松が立てられま

した。それが門松の意味するところであります。古くは櫛を立てる所があつたようですが、平安時代後期から鎌倉にかけて、櫛から松に変わり、竹と一緒に飾るようになったそうであります。そして年神様を家々で迎へお祀りしている間、立てられました。その期間を「松の内」と言つたのです。かつては、所によつて期間が異なりましたが、昨今、「松の内」は七日とされているようです。

このように、日々の生活に溶け込まれた風習の中から、自然に対する畏敬の念と祖先を崇拝することを体得し、その家々の家風を守り伝え、家族の和を育んできたのであります。

とりわけ昨今、家庭崩壊による事件が頻発してきておりますが、その要因の一つは家庭教育の欠如にあることに鑑み、「昔は昔、今は今」などと言って、過去と現在を断ち切ろうとしていますが、先人が永い歴史の中から生み出した風習と知恵に習ふことも一考と思うところであります。

射水神社奉賛会共催 第二回 射水神社「観月祭」

平成十九年九月十五日、射水神社参集殿にて、第二回の「観月祭」が行われ、約七百人の聴衆が、雅楽・尺八の音色を満喫しました。

演奏団体はプログラム順に「富山県神社庁雅楽部」「都山流高琳会」「洋遊会」の各団体が演奏を行いました。



神社庁雅楽部の「浦安の舞」「其駒」の演奏



都山流高琳会の尺八演奏



洋遊会の舞楽



杜の景色

杜の景色（下半期）

6月30日 夏越大祓
7月上旬 職場安全祈願祭
7月上旬 奉納書道展
7月10日 悪王子社秋祭
8月27日 諏訪社例祭
9月16日 秋季大祭
9月22日 日吉社秋祭
11月1日～30日 七五三まつり
11月3日 明治祭
11月23日 新嘗祭
12月23日 天長祭
12月31日 師走大祓
及 除夜祭

奉納書道展

本年もまたにぎにぎしくも、千をゆうに越す書道の力作が、当社奉納書道展によせられました。表彰式には夏休み中という事もあり、沢山の児童・保護者が参加し、また参集殿に掲示される出品作を眺めつつ、高岡市長賞などの優秀作品を参考に、来年への希望に胸をふくらませていました。



七五三詣

七五三詣の時期は、小さな参拝者が多数見えられることから、年間を通じ、最も境内に活気が見られる時期の一つであります。

また本年も、昨年並みのご参拝をいただきました。大神様も、子供達の歓声や泣き声が境内一杯に広がるさまを、喜びと共に温かく見守っておられることを確信いたしております。



新嘗祭

十一月二十三日、恒例に依りまして、新嘗祭を執り行いました。大神様が今年の初穂を初めてお上がりになる祭典であり、太古の昔より厳粛に守り伝えられた祭典でございます。

昨今は食べ物に季節感が希薄となりましたが、旬の食べ物は現在の美食ブームにのり、見直されてきております。栄養面や味以上に、神様からいただいた恵みであるとの認識をさらに深める切っ掛けとなれば、と考えます。



平成二十年 新年初祈祷のご案内

個人祈祷

一、厄年祓

本厄

四十二歳(男) 昭和四十二年生
三十三歳(女) 昭和五十一年生
二十五歳(男) 昭和五十九年生
十九歳(女) 平成二年生

前厄

四十一歳(男) 昭和四十三年生
三十二歳(女) 昭和五十二年生
二十四歳(男) 昭和六十年生
十八歳(女) 平成三年生

後厄

四十三歳(男) 昭和四十一年生
三十四歳(女) 昭和五十年生
二十六歳(男) 昭和五十八年生
二十歳(女) 平成元年生

一、祝事(男女)

還暦 六十一歳 昭和二十三年生

古稀 七十歳 昭和十四年生

喜寿 七十七歳 昭和七年生

傘寿 八十歳 昭和四年生

米寿 八十八歳 大正十年生

一、商売繁昌祈願

一、家内安全祈願

一、合格祈願

一、初宮詣

一、安産祈願

一、その他緒祈願

◎初穂料 五千円より志
(但し厄年祓・祝事祈祷はお酒・饅頭等お供え下さい)

団体参拝

※事前にご予約下さい

一、職場安全・

商売繁昌祈願等

◎初穂料 二万円より志
◎お供物 お酒

◆祈祷受付時間

元旦 午前〇時〜午後五時／二日以降 午前九時〜午後五時
お問い合わせ 社務所 電話0766(22)3104

神前結婚式

御神恩をいただき、幸おおからん事を。

平成19年6月挙式の方々

安井 陽輔・外茂子
飯田 信介・綾子
薬師 将高・美智
山口 真・瞳
坂井 孝道・直美
飯村 慎一郎・佐織
西川 育夫・真紀
空 哲男・美加
藤重 崇史・のり子
濱野 光宏・文子
島 悟・貴子
高口 昌幸・理子
鳥本 幸一・美登里
若林 勝・香代子
吉岡 靖晃・佳子
村本 徹・加奈子

平成19年7月挙式の方々

坂田 均・奈美
吉塚 智明・奈美
中岡 聖介・真樹子
谷井 孝光・真美香

平成19年8月挙式の方々

菊地 壮一・葉子
齊藤 拓也・晃世
吉谷 一行・麻里子
穴田 生・裕子

平成19年9月挙式の方々

瀧川 啓二・美幸
中島 篤典・貴子
関岡 紀之・麻佑子
吉井 健・愛子
竹山 修司・純子
中田 寛徳・奈々子
渡辺 武志・梓
村上 透・栄美
和田 瞬佑・幸恵子
平野 寿治・恵子
野村 潤一・美由紀
藤井 均・弘子
福島 泰嗣・麻衣子
八塚 英嗣・麻衣子

平成19年10月挙式の方々

山本 博昭・聡美

長岡 正丈・秀穂
田崎 丈輔・奈子
三村 太一・文子
浜本 賢治・瑠美子
山口 昌輝・美保
赤井 新太郎・季久江
穴田 昭治・志津枝
土合 祥司・美穂子
山田 弘・こず恵
小栗 智靖・直美
蒲田 幸平・脩圭里
栗田 宗典・裕美
武内 巖・智子
田島 慎也・さつき
納原 祐志・さおり
坂中 章嘉・未佳
國分 裕司・優子
大寺 員央・光子
竹内 一恭・礼子

平成19年11月挙式の方々

池田 誠・美穂

萩原 英樹・ひとみ
中村 友則・貴美子
北本 清和・英史子
本江 宏光・薫
山本 政弘・美紀
荒木 正道・美紀
軍記 祐一・絵里子
森田 哲玄・晃子
森越 洋介・久美子
津嶋 榮二・朋美
浦島 智之・美由起
小池 彰・真理子
足達 伸昭・久美子
桐 康博・知子
森田 直人・智代子
長徳 昌弘・夏季
吉野 榮樹・彰子
本間 榮亮・元子
松村 浩司・裕子

平成19年6月〜

11月挙式の方々

越中の食彩

有限会社 広又蒲鉾商店
代表取締役社長

広野 吉隆

婚礼蒲鉾

蒲鉾が初めて文献に現れたのは、平安時代でそもそものは宮廷料理であつた。新鮮で豊富な魚に恵まれた富山でも古くから蒲鉾づくりが行われ、高貴な人々が食した料理蒲鉾として発展、今日、婚礼など祝儀用の蒲鉾では群を抜く生産県となつた。

明治、大正時代から婚礼用に使われていた真鯛が不足した折、鯛の形をした蒲鉾で代用し、それが今日の婚礼蒲鉾として根付いたと伝えられている。

なぜ富山県だけがこれだけ婚礼蒲鉾にこだわりをもってきたのだろうか。それは、富山ならではの風習に関係があるようだ。

富山には婚礼をはじめ祭りや祝いの席にだされた御膳を持ち帰る風習があり、持ち帰った料理はお裾分け（お福分け）として親類や近所に振る舞われた。とくに婚礼の場合は集まってくれた人達に結婚を承認してもら

う意味もあり、そこで出される品々を裾分けすることは承認の輪を広げることにもなる。自在に切り分けられ、日持ちのする蒲鉾は、この場合、実に合理的であつた。ずつしりと重い婚礼蒲鉾。その重たさは、人々の心の重みでもある。最近、豪華な披露宴を敬遠する若者も多いが、人と人のつながりを大切にしてくれたお裾分けの心だけは、これからもしっかりと受け継いでいきたいものである。

婚礼蒲鉾



大きさは 40cm 前後が主流

神道

いろは

「官国幣社」などの呼び方について教えて下さい。

神社名に冠する語として「官幣大社」や「国幣小社」という名称を用いることがあり、これを社格といいます。

この社格は、各時代の神祇制度により内容が異なっています。古代には律令制度の確立とともに、国家が全国の神社の中から特に官社という社格の神社を定めました。官社では毎年の祈年祭に幣帛がお供えされるほか、災害や全国的な疫病蔓延などに際して、公の祈願が行われました。

『延喜式神名帳』に二千八百六十一社に及ぶ官社が記載されており、中央の神祇官より幣帛を受けるのが「官幣社」、また各地の国司より受けるのが「国幣社」とされ、この中でも「大社」と「小社」が規定されました。このほか、特に霊威ある神には「名神大社」という社格が与えられました。

中世に入り、往時の社格制度は形骸化していきますが、現在でも『延喜式神名帳』所載の神社を特に

「式内社」と称し、歴史の古い神社であることを示す社格の一つとして用いることがあります。

明治時代には新政府により、神祇制度も改正されました。社格制度も全国神社を「官社」と「諸社」とに分けて、「官社」では皇室より幣帛料がお供えされる「官幣社」と、国庫からお供えされる「国幣社」とが、それぞれ「大社」「中社」「小社」に分けられました。このほか、新たに「別格官幣社」という社格が、皇室や国家に忠功のあつた臣下をお祀りする神社などに与えられました。

「諸社」では、府県内での崇敬を有する「府県社」、郷・村内において崇敬を有する「郷社」や「村社」に分けられました。

戦後、この社格制度は廃止されましたが、現在でも天皇陛下が各地方に行幸される際には、当該地の旧官国幣社に幣饌料をお供え遊ばされます。



名神大社の社格を有した県内唯一の神社「射水神社」

『ふるさと』

射水神社』

⑨二上神と悪王子社

万葉の歌人大伴家持が越中守となり、国司として赴任した当時（七四六～七五一）、すでに二上神が祀られていたことは、万葉集の中に詠まれている歌によって知ることができるが、残念ながら創建を知る古文書が現存していない。射水神社の創建また御祭神二上神の神格については、古来、二上神が神仏習合によって二上山大権現として祀られた二上山養老寺の社伝によって、二上山中腹に鎮座する悪王子社（前の御前）の創建に深く関わりがあると考えられる。社伝・伝承等はどの神社、仏閣にも残されているが、それらは捏造された部分もあり、それを元に歴史上事実を解明するには疑問もある。しかし、信仰の発生の対象として全く根拠がないとは言いきれないのである。

射水神社の別当寺であった二上山養老寺に保存されている社伝に次のものがある。

「越中二上山由来」、二上山大権現由来書」享保二年（一七一七）に記

されたもの。

二上山養老寺明細書」享保十四年（二七二九）本覚坊九世・親政在世中に記されたもの。

「射水郡二上山養老寺明細書」天明六年（二七八六）本覚坊十五世・祐存在世中に記されたもの。

「正一位國主二上山大権現開帳略縁起」文政七年（一八二四）本覚坊十九世・祐榮在世中に記されたもの。これらの社伝は約百年間に記されたもので、誰が記したかは判明しないが、内容はほとんど同じである。

「越中二守山由来」の要約は次の通りである。

昔の二守山は神代の頃より悪王子が、この山を守っていて、この悪王子は北は女郎脇村、西は俱利伽羅山、東は堺川の越中全土から毎月一日、八日、十三日、二十三日、二十八日の五回にわたり一人ずつ月に五人の人身御供をとり、まないた橋という所に置き神樂橋で神樂を奏して一年に六十人を強奪するので、万人が非常に嘆き悲しんでいた。

この事を元正天皇がお聞きになって、その憂いを取り除くために、僧行基に勅命が下されて、大和國二上山に祀つてある三社、本社瓊瓊杵尊（本地釈迦如来）、左社火闍降命（本地薬師如来）、右社彦火々出見命（本

地観音菩薩）を勧請し、悪王子を鎮め奉り万民の患を救えと仰せられた。

行基は命により、養老元年に大和國二上山三社を勧請して当山へ下向して、悪王子の本地に毘沙門天を彫刻して、これを二上山の地主権現として、五穀豊穡の守護神として崇め祀つた。それより二上山に仏閣・伽藍が建立され、三月八日には本社二上山大権現を祀り、その他百二十の末社、山頂には山王二十一社が勧請されて、三千八百の坊、社家三百六十軒が四門の内に並び建てられた。養老寺の寺号は、元正天皇の勅命により、養老元年に祀つた故である。その後、正一位國主の号を賜り、国家鎮護の靈験あらたかな神として萬民が参拝する様子は市を成すようであった。

（以下、次号に続く）



二上射水神社拝殿(旧二上山養老寺護摩堂)
寛政5年(1793)建造

編集後記



本年の第二回「観月祭」開催にあたり、市内を中心とした厚志の方のご協力に對しまして、本紙上をお借りして、厚く御礼申し上げます。

表紙の写真は雪化粧をした古城公園の姿でございます。

万葉集の最後をかざる大伴家持の歌

新しき 年の始めの初春の

今日降る雪の いや重け吉事

この歌は、天皇への朝拝に続く宴での歌であり、国家の安泰を言祝ぐ歌でもあります。国家は勿論、そこにいならば臣下の者、そして自分自身に對しての「いや重け吉事」という思いは、お正月、家族揃って初詣に行き、御神前にて手を合わす、現代の我々にも通じる思いなのではないでしょうか？

時を越え生き続ける「祈り」。社会の有り様は、万葉時代とは大きく変わりましたが、元日に祈る人間の心は少しも変わらず、未来へと続くことを念じてやみません。

発行 射水神社
発行所 〒九三〇〇四四 高岡市古城一
TEL (〇七六六) 二二一三二〇四
FAX (〇七六六) 二二一三七二五
印刷所 キクラ印刷株式会社



この誓いは、神へ
永久に共に

参集殿通信

声高らかに誓う

「誓紙奉読」



平成18年11月挙式 釣家 炭谷家 挙式

—うつくしの杜ブライダルフェアのご案内—

Utsukushi no mori Marriage story



平成19年6月挙式 安井家 笠井家 ご披露宴

射水フェスタ 2008

平成20年2月24日(日)

11:00~18:00

- ・模擬挙式・模擬披露宴
- ・コーディネイトショー
- ・ケーキ試食
- ・会場コーディネイト展示
- ・料理・引出物展示
- ・和装・洋装衣裳展示
- ・相談会

春フェスタ

平成20年4月13日(日)

10:00~19:00

- ・模擬挙式・^{るりいろ}瑠璃色ウエディング
- ・結びのセレモニー・ビデオレター
- ・会場コーディネイト・引出物展示
- ・相談会

うつくしの杜、結婚式場

射水神社

〒933-0044 高岡市古城1番1号(高岡古城公園内)

お問合せ (0766) **22-0808**

U R L ■ <http://www.imizujinja.or.jp>

Eメール ■ jinja-k@mbs.sphere.ne.jp